「雑　感」

福岡県高等学校書道教育研究部会会長
福岡県立稲築志耕館高等学校　校長　田中憲育

書道教育研究部会会員の先生方におかれましては、日頃から各学校における芸術教育に御尽力いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

実は先日、美術・工芸部会からも原稿依頼を受けました。「書教育福岡」と同様、「美工研福岡」という研究誌を発行しており、少し前に拙稿を提出したばかりです。幸いにも、私は今年度、書道、美術・工芸両方の会長を兼ねておりますので、同じ話題での思いを述べさせていただきます。少し昔の話になりますが、私が大学院に進学した際、美術教育専攻に進みました。書道はもちろん、美術教育についても多く学ぶ機会がありました。その研究の一環で、県外のとある美術館を訪れる機会を得ました。その美術館には地域が誇る数々の美術品が展示されており、これまでの歴史と巧みの技に圧倒され、大きな感銘受けたことを覚えています。

その中で、ふと目に留まる展示品がありました。そこには壁に額縁のみがはめ込まれてあり、額の中はガラスで外の景色が見えるようになっていました。そしてその脇には、「ここから見る一番の絶景をご覧ください。」という言葉が添えられていました。おそらくここから見える景色は、四季によって表情を変え、天然の風景画として見る側を魅了しているのでしょう。

しかし私は、この作品の脇に添えられた「一番」という言葉に違和感を覚えたのです。穿った見方かもしれませんが、風景というのは、場所々々で様々な表情を見せます。美を感じる場所も人もそれぞれであり、決して一か所に限定されるものではないと思うのです。しかし、限られたスペースの中から限られた風景を見せ、それを一番と謳うこの作品は、「ここじゃないとダメですよ」と、何か決められた美を一方的に押し付けられているような気がして、若かった私は生意気にもこの作品に対して否定的な感情が湧いたのでした。この出来事は、ずっと胸の奥に引っかかっており、気付けば、私自身の「生徒への指導は、決して自分の美の価値観を押し付けるものであってはならない。」という指導方針の礎になっていたのです。

生徒はそれぞれに美に関する価値観を持っています。それを指導者の経験値のみに頼り、芸術教育を指導すれば、知らず知らずのうちに生徒の貴重な才能をつぶしてしまっているかもしれません。特に、我々書の世界では、多くの流派があり、自分の所属する流派が一番であるという自負があり、それは大切な姿勢だと思います。しかし、学校の教育者として生徒を指導する場合は、広い視野を持って多様な表現を認める姿勢が必要だと思うのです。

ぜひ、先生方におかれましても、日頃の授業の中で生徒の個性を見極め、その才能が開花できるような手ほどきを心掛けていただければ幸いに思います。生徒の無限の可能性を、先生方の卓越した幅広い美的感覚をもって伸ばしてあげてください。

会員の先生方のますますの御活躍を期待しております。